

被災経験とコミュニティを活かした 十津川村四村地区の取組 (奈良県十津川村／四村地区)



十津川村四村地区とは

【地域特性】

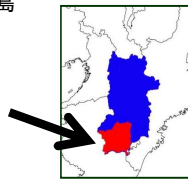
- ・十津川村は日本一広い村であり、面積(672km²)の約96%は山林を占める。
- ・四村地区は奈良県の最南端にある「十津川村」の南端に位置する。
- ・保育所1か所(村内4か所)、小学校1校(村内2校)、高校1校が立地し、奈良交通と村営バスの営業所が立地していることから、住民の利便性も良く、人口が917人と、人口も十津川村で最も多い。
- ・四村地区は、9つの大字(平谷、込之上、椋原、那知合、谷垣内、山手、猿飼、桑畑、七色)で構成されている。
- ・少ない平地に住宅があり、集落をつなぐように道路が整備されている。

【災害リスク】

- ・当村全体が「四万十帯」と呼ばれる付加体であり、深層崩壊が発生しやすい。
- ・村を縦断するように走る国道168号線が村の生活を支える重要な道路だが、当地区の大字桑畑では、土砂災害がたびたび発生し、通行不可能な状況となっている。
- ・集落が分散しており、大字椋原や大字猿飼といった迂回ルートがない地域もあり、この道路が寸断した場合に、人・物資の支援が困難となる地域もある。
- ・水害においては、二津野ダムに面した大字込之上、大字平谷で、国道より下に住宅等が建設されており、上流にある風屋ダムの放流等により二津野ダムが増水した場合に、浸水被害が発生すると想定される。

【災害履歴】

- ・明治22年の大水害
- ・平成23年の紀伊半島大水害



四村地区位置図



紀伊半島大水害時の折立橋の被害

これまでの取組状況

1. 平成23年の紀伊半島大水害以降、平成25年に村内の区長や大字総代、消防団員、自主防災組織の役員に参加してもらい、防災マップを地区ごとに作成。
2. 平成26年には、村内の区長や大字総代、消防団員、自主防災組織の役員に参加してもらい、避難所への避難、起震車体験、LPガス発電機の使用訓練を実施。



平成25年に作成した防災マップ



起震車体験の様子

本年度(令和元年度)の取組状況

【7月】

四村区の区長に地区防災計画の趣旨を村役場から説明。

【8月】

地区防災計画の策定に向けたワークショップ開催の企画を四村地区の区長、大字総代で検討。その結果、9月にワークショップの開催を決定。

【9月】

地域住民約30名の参加を得て、ワークショップを開催。地域の災害リスク確認や課題を確認、アドバイザーの奈良女子大学室崎准教授のアドバイスを受け、過去に作成した防災マップの見直しと、新たに避難や備蓄の課題検討を行った。

【11月】

四村区の区長と大字総代で、これまでに行っている災害時の対応を明文化するため、関係者協議を実施。年度内の骨子作成を目的として進めた。

【3月】

作成された地区防災計画の骨子を地区全体に周知し、住民がいつでも確認できるように進める。

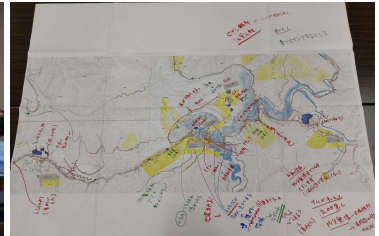
本年度(令和元年度)の活動の成果

【防災課題の抽出】

- ・集落ごとでグループになり、抱えている課題を抽出し、共有できた。
(抽出された課題の一部)
- ・避難支援を求める要配慮者等への対応が必要
- ・避難場所の再検討が必要
- ・自主避難時のルールや体制の確立が必要
- ・各大字の総代は災害時に対応を行っているが住民は把握していないため周知が必要



ワークショップの様子



課題等のマップへの書き込み

【防災活動の明文化】

- ・どの大字でも、総代の災害時の取り組みを住民が知らないという課題があったため、各大字総代が情報共有し、さらに明文化した。

【防災活動の見える化】

- ・A2サイズの紙に地域のマップを印刷し、災害時に避難経路や避難先、避難の要支援者や誰が誰に避難を呼びかけるなど、見える化ができた。



新たに作成した防災マップ(大字平谷)

【防災計画の定期的な見直し更新の道筋が立った】

- ・防災計画を作って終わりではなく、今後も定期的な見直しを行い、地区防災計画を現状に合わせて更新していく認識が共有できた。具体的に、各大字総会の中で、防災計画に関する事項を毎回組み込んで見直しを行うなど。

今後の課題

1. 住民への地区防災計画の周知
2. 地区防災計画で定めた取り組みの実施
 - ・タブレットの使い方講習会(大字七色)
 - ・発電機や投光板の使い方を住民に知ってもらう。(大字谷垣内)
 - ・発電機や衛星電話の使い方指導(大字那知合) 等
3. 定期的な地区防災計画の見直し及び更新



LPガス発電機



衛星電話